

メアリー

クラウン

## メアリー

---

昼下がりの日差しは強い。灼熱の太陽に手を翳し、もう少し早く出れば良かったと後悔した。車に乗り込み、キーを回す。今日はポンコツの機嫌が良いらしい。思わず尻上がりの口笛を吹いた。

後部座席を振り返る。真っ赤な薔薇の花束。彼女が好きだった色だ。

彼女は魅力的だった。

彼女はドライマティーニを愛していた。恐らく恋人と同じくらい。

とは言え、見る度に恋人が違うから、深く愛していたのかと問われたら首を傾げざるを得ない。だが、彼女は恋人の虜で、いつだって笑顔が輝かんばかりだった。刹那を彼女は生きていた。それが彼女の全てで、男達の心を奪う理由だった。

所詮は遠巻きに見ていた俺の主観だ。俺の愛し方はとても距離がある。

その夜、彼女は珍しく一人だった。一見してわかるだろうに、「隣、空いているかしら？」と訊ねられた。艶めいた声音と唇の価値を知り尽くしている女。

まるで映画の登場人物に話しかけられたような気分になった。

彼女が頻繁にこの店を訪れているのは知っていたが、俺は観客の立場だ。彼女はいつも主役で、楽しそうに男と話をしていた。ドライマティーニを飲みながら。

洒落た言葉の一つも返したくなって、「俺が惚れた女の席だ」と答えた。

彼女は笑顔のまま席についた。

燻らせていた煙草から紫煙が立ち昇る。視線を指先から、カウンター奥の棚に並んでいるボトルのラベルに移した。煙草の脂で汚れたラベルとボトルを、見るともなしに眺める。

マスターを呼んで彼女が注文したのは、意外にもドライマティーニではなかった。

「ブランデーの方が口に合うの」と彼女は笑った。小鳥の羽みみたいな濃い睫毛が上下した。

彼女は舐めるようにブランデーを飲む。一通りのラベルを読み終えて、彼女へと視線を戻した。俺のグラスはウィスキーが半分残ったまま。氷がカランと鳴った。

視線を伏せていた彼女は、俺に訊ねた。

「あたしに似合うカクテル、ある？」

「ブラッディ・メアリー」

「好きな色だわ。次、それにする」

紅い唇が綻んだ。

美味そうに二杯目のグラスを空けると、彼女は席を立った。

一ヵ月後、風の噂で彼女が死んだと聞いた。恋人を殺して海に身を投げたそうだ。

海岸線を走り、車を降りた。少し歩いて断崖に佇む。

今日は風が強い。

薔薇の花束を海に放り投げた。あの夜と同じように、赤い花を。

名前も知らないメアリー。

噂が一人歩きするくらい、華のある魅力的な女。